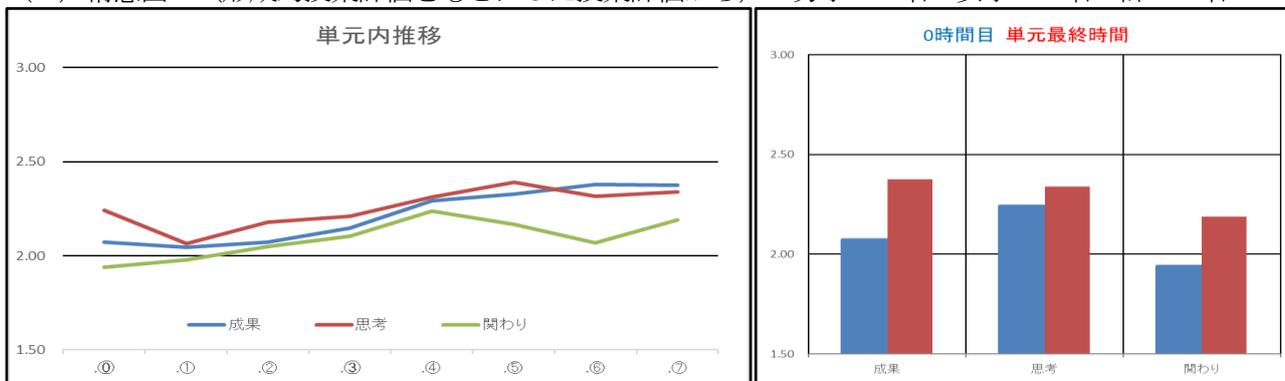


1 単元名 いーち、にいの、さんっ！後方片膝掛け回転にチャレンジ (器械運動・鉄棒運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子15名 女子15名 計30名



- ・「成果」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。授業を行うごとに数値が上昇傾向にあることから、児童にとって成果を感じられる授業内容であったこと、または目標が明確であったことが考えられる。5時間目には高い数値を記録した。これは、単元後半の課題解決学習において、一人一人が課題を解決するために試行錯誤した結果、その時間で少しでも技能向上を感じることができたことがうかがえる。
- ・「思考」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。単元前半に比べ、思考をはたらかせる学習を重視した単元中盤～後半は数値が高くなった。これは、児童自身が課題を見つけ、練習方法を選択し、課題を解決するために思考しながら練習に取り組むことができていたことがうかがえる。
- ・「関わり」は単元前よりも単元最終時間の数値が高くなった。4時間目に高い数値を記録したのは、自身の課題によって練習方法を選択し、グループの友達と見合いながら学習したことが要因であると考えられる。5時間目では、課題解決学習において課題を友達と共有し関わり合いながら、友達と共に試行錯誤しながら学習できたことで、数値が比較的高くなったと考えられる。そして、6時間目では、単元終盤ということもあり、関わりよりも練習に重点を置く児童が多かったのではないかと推察される。

(2) 技能面

	①両膝掛け振り (鉄棒の高さまで体を大きく振ることができている)			②片膝掛け振り (振り上げ足を斜め前へ突き出している)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	7	16	7	4	17	9
単元後	7	19	4	8	15	7
	③片膝掛けつばめ (顎を上を上げ、体がそっている)			④片膝掛け振り上がり (片膝掛け振りの勢いを活かしている)		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	4	17	9	4	7	19
単元後	17	10	3	7	6	17
	⑤後方片膝掛け回転 (膝を離し、上体が下がっていない)					
	できる	もう少し	できない			
単元前	5	2	23			
単元後	6	7	17			

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。片膝掛け振り上がりや後方片膝掛け回転に直結する体ならしの運動(片膝掛け振りや片膝掛けつばめなど)を、毎時間行ったことが、技能向上の一要因として考えられる。また、単元後半の課題解決学習の際に、自分の課題解決のために効果的な練習方法や場を選ん

で練習できたことがうかがえる。

- ・本単元の主運動である後方片膝掛け回転では、できる児童とできない児童の二極化が起こってしまった。腕支持ができず鉄棒に上がり片膝を掛けることができないことにより、鉄棒に上がる練習で終わってしまった児童もいた。また、上り技である、片膝掛け振り上がりの数値の上昇が少なかった要因として、単元内での練習時間の確保が十分にできなかったことであると推察される。

### (3) 思考面

問 後方片膝掛け回転ができるようになるために、どのような取り組みや練習が必要だと思いますか(しましたか)。(複数可)			
単元前	単元後		
・勢いをつけて回る練習	8	・片膝掛けつばめから勢いよく後ろに回る練習。	7
・膝掛け振り上がりの練習	3	・頭を大きく後ろに倒す練習をした。	7
・足を回せるようにする練習	3	・膝を鉄棒に引っ掛ける練習をした。	6
・逆上がりの練習	3	・片膝掛けつばめの練習。	5
・バナナ振りの練習	2	・上体を倒さないように意識して練習をした。	3
・足を後ろにひいて勢いをつける練習	1	・勢いよく後ろに回る練習をした。	2
・どんな技でもいいから後ろに回転する練習	1	・友達に見てもらいながら練習をした。	2

- ・後方片膝掛け回転の知識が定着し、技能ポイントを踏まえた取り組みや練習についての記述が増えた。児童が技能ポイントを意識し、自己の課題解決に向けて必要なことを考えながら学習することができた成果だと考える。

## 3 成果と課題

### 中学年のめざす姿

自分の課題を見付けたり、課題解決に取り組む内容を選んだりする中で、知識や考えたこと、気付いたことを伝え合うことができる児童

#### 【成果】

- ・課題解決のための思考がしやすくなるよう、ポイントを絞った発問や活動を取り入れたことで、技の習得のために意識することや自分に合ったよりよい方法を考えながら練習に取り組むことができた。体の動きの特徴やポイントを見付け、それを全員で共有することで、主運動や課題解決につなげることができた。技に関して漠然と考えるようにするのではなく、ポイントを絞り考えるようにすることは有効であると感じた。学習カードも同様である。
- ・全ての単元を通して異質グループで活動した。鉄棒運動における上位、中位、下位群の児童3名で1グループとした。低学年の特性から、児童が常に活動している時間をつくることが重要であることから、練習をする児童、補助・練習を見てアドバイスをを行う児童、時間を計る児童の3つの役割を与えた。運動量を確保する面でも効果的であったと感じた。
- ・単元前半は、技能の高い児童が積極的に発言している姿が多かったが、単元が後半になるにつれ、技能差に関係なくアドバイスや補助をすることができているグループが多く見られた。「もっと勢いよく後ろに倒れるといいよ!」「体が前に倒れないように!」というアドバイスのほかに、「すごい!できるようになったじゃん!」「前よりよくなっているね。」という仲間の伸びを讃える姿もよく見られた。学習のねらいに沿ってグループを構成する必要性を強く感じた。

#### 【課題】

- ・技能ポイントに着目して、それを意識しながら練習をするようにするために、できている理由やできていない理由を考える発問や活動を取り入れたが、ポイントを理解してわかっているのにできない児童が多く、技能ポイントを練習に取り入れることが少なかった。児童が「わかる」＝「できる」になるための有効な支援を提示できるようにしていきたい。
- ・自分に合った練習方法を選べるように、スモールステップ表を作成し、自分がどのレベルまでできているのか、確認することはできていたが、必ずしもスモールステップの最初の技ができないと次のステップに進むことができないという訳ではないことや、技の完成度を高める方法を明確に提示することができなかった。課題解決に直結するヒントや練習方法をもっと提示できるようにしていきたい。
- ・鉄棒運動は一つの技だけではなく、組み合わせた流れの練習を行うことを体ならしの運動や主運動の練習を通して行うべきであると感じた。